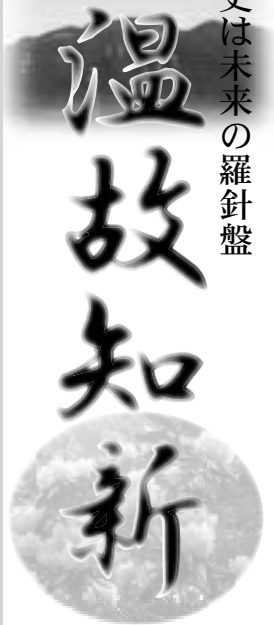


歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第五巻「文化財編」を刊行しました。第一章／美の香り、第二章／匠の文化、第三章／住の演出、第四章／地に根ざす、の四章からなる内容の一部をご紹介します。各公民館や教育委員会において一冊四、〇〇〇円（税込み）で販売しています。ぜひお買い求めください。

第二章第一節では、「木に刻まれた信仰 彫刻」と題して、日野町内の寺院・仏堂に伝わる仏像を取り上げました。

町内には、平安～室町時代にかけて造像された仏像が多数残されています。このうち約6割が平安時代に造られたもので、平安仏の多さが日野町の特徴となっています。また、15軀が重要文化財、1軀が県指定文化財、11軀が町指定文化財に指定されるなど、学術的評価の高い仏像が多いことも、日野町の特徴です。

本節では、室町時代以前に造像された仏像を一つずつ紹介し、形や技法・仏像のもつ意義などについて分かりやすく解説していきます。ここでは、町内に伝わる平安仏の代表作について紹介します。

### 平安時代前期の仏像

平安時代の仏像は、その作風や技法の違いにより、10世紀後半を

境とする前・後二つの時期に分類することができます。

8世紀末から10世紀後半にかけての平安時代前期の仏像は、一本の木材から彫りだす一木造と呼ばれる技法が好んで用いられました。この技法を用いた仏像は、一本の木材から彫りだされるため、量感を伴った力強い表現がその作風となりました。

この一木造の技法を用いて造像された日野町内の代表作が金剛定寺（中山）の木造聖観音立像です。一木造の丸彫りに近い技法、奥行きのある立体的な造形など、平安



▶木造聖観音立像（金剛定寺）

時代前期の仏像の特色を示しています。日野町内最古の作例となる本像は、9世紀にさかのぼる貴重な作例として注目されます。このほか、12世紀の作でありながら、一木造の古風な造り方を用いた秀作として、西明禪寺（西明寺）の木造十一面観音立像や長福寺（松尾）の木造十一面観音立像があります。

平安時代後期の11世紀に入り、仏師定朝が活躍するようになると、仏像の技法・表現に大きな変化がもたらされました。定朝が確立した作風は、やわらかな造形や優美な衣文線の特徴としており、平安貴族好みの和様を極めたものでした。また、技法も複数の材を組み合わせて造る寄木造・割矧造が用いられ、繊細な表現が可能となりました。定朝作の平等院鳳凰堂本尊木造阿彌陀如来坐像は、「仏の

### 平安時代後期の仏像

本様」として模範となり、都だけでなく、地方にも広く普及しました。日野町内において、定朝様の影響を受けた作例が登場するようになるのは、11世紀後半から12世紀ころになります。これらの中で、最も大きく、古様をあらわしているのが安楽寺（下駒月）の木造阿彌陀如来坐像で、11世紀後半の作とみられています。割矧の技法・繊細な衣文表現など、定朝様の様式にのっとった秀作として貴重です。



▶木造薬師如来立像（法光寺）

また、12世紀の作とみられる定朝様の代表例として、法光寺（北脇）の木造薬師如来立像や、金剛寺（大谷）の木造聖観音立像が挙げられます。

平安時代における造寺造仏の隆盛は、日野地方における信仰の広がりや経済的な発展を雄弁に物語っています。